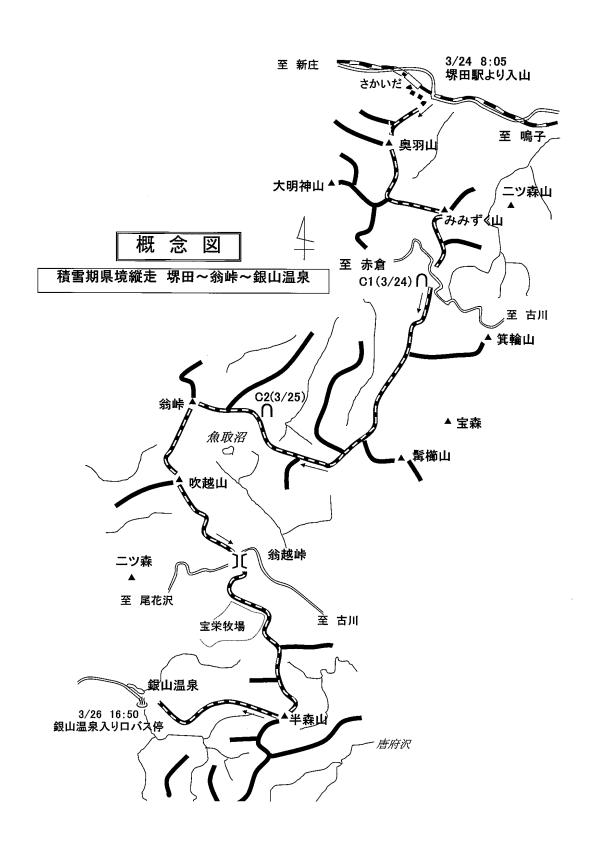
第二章 後仙台山脈

翁峠—禿岳—虎毛山—栗駒山

全線を結び落着した。」
全線を結び落着した。」
全線を結び落着した。」
「二万五千図でつなぎ合わせて六枚の鬼首、向町、鬼首峠、軍沢、桂沢、「二万五千図でつなぎ合わせて六枚の鬼首、向町、鬼首峠、軍沢、桂沢、「二万五千図でつなぎ合わせて六枚の鬼首、向町、鬼首峠、軍沢、桂沢、「二万五千図でつなぎ合わせて六枚の鬼首、向町、鬼首峠、軍沢、桂沢、



積雪期県境縦走 境田~翁峠~銀山温泉

昭和五〇年三月二四日~二六日

今出隆康 (単独)

全行程三九キロメートル

地形図(二万五千図)羽前赤倉・鳴子・魚取沼・西上野目・銀山温泉

あたりながら待合時間を費やす。五時、自宅発車、五〇分後には古川駅に着いた。予定より早く着いたので駅のストーブに五時、自宅発車、金料パッキング、朝食を終えて待っていると兵藤君の車が迎えにくる。

防風林に入って行く。時計を見ると八:○五、早速ワカンを履かねばならない。薄暗い杉 の樹林帯を通過して行くと間もなく傾斜が急になってくる。 を与えてくれる。宮城・山形県境の境田駅 メートル位の雪の壁を巡らせていた。ホームの駅長に切符を渡してホームから直接南側の 行く。 車窓から今日登るミミズク岳が雪一色で東西に羽振りをきかせて地図と照合の機会 六:二八、小牛田始発の二番列車に乗車。陸羽東線の沿線には次第に残雪が多くなって (海抜三四○メートル) はホームや引込線に二

庭を走る雪原の朱色の列車を眼で追っていた。 彼方に神室山塊が魏然たる山姿を見せる。極めて好調なスタートに満足しながら眼下の箱 ス捗る。広い尾根は雪原状を呈す。半時間後、県境尾根の肩に出て一息入れる。ふり返る **曇ながら青空も見られる。 植林帯の上部は伐採帯となっており雪の適度な締りによりペー** 八:三○、樹林の奥端で一本立てる。西風強く寒い。積雪平均一メートル位、視界良好、

ハと発音するらしい。これより痩尾根となり半時間後には、 ○:○五、その名も雄大な奥羽山(七六六メートル)を通過。 七五三Pを通過、 オオウとは呼ばずオオ 林相はブナ

県境を突破した事になる。 り雪崩や崩壊した新しい岩肌など生々しい。痩尾根を急降しながら念仏でも称えたくなる なり八五九メートルのミミズク山西峰に達する。一一:○五より四○分間の昼食休憩を行 純林となる。急な降りと再び一二〇メートルの急登をすれば南下中の尾根は俄かに東進と ような風景を垣間み垣間み安全地帯に急ぐ。七四三P通過により本日は七キロメートルの 一二:三〇、ミミズク山八六一メートル本峯に着く。 東面は身の毛もよだつ断崖とな

紙西 どのような係り合いがあったか知らないが何か強い友情の絆があった事だけは察しられ るわしく眠る君と永久に語らん国見の山々」とあり昭和四三年 宵の宿を提供してくれる。ザックをデポして一五:○○まで前方偵察の為出張する。峠に は風道となって雪のなくなったところがありそこに一基の慰霊塔があった。 更に雪庇に乗り一・五キロメートル進んで一四:三五、 一等空尉、愛機と共にこの地に瞑す。昭和四九年秋彼岸、宮崎山岳会建立と添えてあ 追悼の一首は宮崎山岳々長猪股哲夫氏の作であろう、散華した空尉と宮崎山岳会に 田代峠に到着。 一月一七日一三時四七分 見事な雪庇が今 「雪華に夢う

あった。続いて七七九Pまで四五分間の下りと上り。 代峠雪洞より四キロメートルの歩行にて七五一Pに立つ、約三時間を費やした九:〇〇で いると雪やゝ小康となり附近の視界を得る。この附近は尾根広く雪原状をなしている。 派すぎる程のよき出来ばえ、広々とした白銀御殿である。風も凪いで静かな夕暮であった。 に伐採地へ出る。しかし六〇三Pと六一二P附近は特に視界不良となりルートに迷い行き ·戻りつ雪原を彷徨する態であった。 七:四五どうやら六一二Pにたどり着き一本立てて 二五日、 かし天気図は香しからず、 雪洞作業開始して小一時間、 五:五〇出発。 外界は風雪となっていた。視界は五○メートル。行動二五分後 明日の行動に一抹の不安を抱せる気圧配置となっていた。 気象通報キャッチの為休憩する。一七:二〇雪洞完成、 風雪の切れ間に鬢櫛山の平頂が幻の 立



に感謝しつつ翁峠に憩う。 図磁石を手放す暇もない今日の山行は少し疲れた。本日は一〇キロメートル進んだ。雪洞 求めてさまよう。一四:三〇雪洞適地発見、直ちに作業開始悪天の為、早々に避難する。 地帯の如し。 り思っていたが意外にも伐採帯であり真白な雪面又雪面であった。視界三〇メートルとな を続ける。一二:四八、沢底通過、一三:一二、七二九P通過。この附近は原始林とばか にじんで書けなくなってきたからだ。一○:二六~一一:○七まで昼食。一一:三六、七 は霏々と降る重い雪、 の附近で最も低い六五〇メートルのコルはまるで沢底と云った感じである。暗い雪雲から 六:〇〇雪洞完成、 第二回第三回の迷走はじまる。一三:四五、方向を見定める為待機。左手は広大な伐採 五. 世 日 通 過、 〇:一三、中間ピーク通過、 依然風雪。一二:一二、七六九P通過中、ラッセルは二○~三○センチ、こ 一四:〇六、七八三Pの平らな頂上、 天気図を描く。明日も余り期待の持てそうもない天気図である。 地図磁石を頼りに盲目のように視界を剥奪されてひたすらラッセル 八二一Pでツェルト休憩。 更に深まるラッセルを続け雪洞適地を メモをとるのも雪でインクが 地 - 87 -

ように現れる。新雪はそろそろラッセルの抵抗となってブレーキをかけはじめる。

優れる。 いと知る。山頂は雄大な雪原となり頂上部は小高く盛り上がっている為に展望はすこぶろ 自然公園翁峠、 に鉄魚で日本に冠たる魚取沼を俯瞰しつつ灌木疎らな雪尾根を行く。頂上には御所山県立 新雪にワカンの跡を刻みつつ高度差二三〇メートルを登る。 てきたので急いで写真を撮り二〇分の頂上滞在として下山にかかる。 二六日、雪洞出発、五:二五。 月山、 西方眼下に庄内平野及び船形北麓の山襞を眺めているうち、こちらにも雪雲が湧 、最上町、 葉山、 神室連峰など見わたせる。北望の栗駒、 尾花沢市と書かれた角柱の標識あり、 無風、 曇。 翁峠頂上まで約一五○○メートル。 所要一時間一○分、 山形側より夏道があるらし 南望の荒神、 船形山は雲に 南方眼下 一歩一歩

一キロメートルの距離を南下し迷うことなき痩尾根をたどれば一つの鞍部を経て九

湿原凹 立ててから八:○五南を指して三○○メートル下降に移る。急斜面の新雪なので表層雪崩 呈しツツジ様の灌木が僅かに雪面に現れシュカラブに敝われている。小雪の舞う中で一本 三九メートル)となり初めてまみえた魚取沼ともお別れの時が来る。頂上一帯は大雪原を 天幕でも張ってのんびり暮らしてみたい。そんな想いを胸に刻んだ。緩い上り下りの雪原 の危険が満ちている。慎重な一歩一歩ステップでどうやら無事六二九メートルの鞍部に着 を行けば恐らくは古い爆裂口であろう魚取沼のおよそ三分の二を巡る尾根路も吹越山(九 一Pに到着。 。やれやれと緊張もほぐれて仰ぎみる純白の大斜面にラッセルが一筋白布のミシン糸の .陥地が見下され何やらファンタジックな魅力を感じさせる場所がある。 夏のある日 七:四五なり。 途中西側の急斜、 高度差二五〇メートル下にクルミ平なる

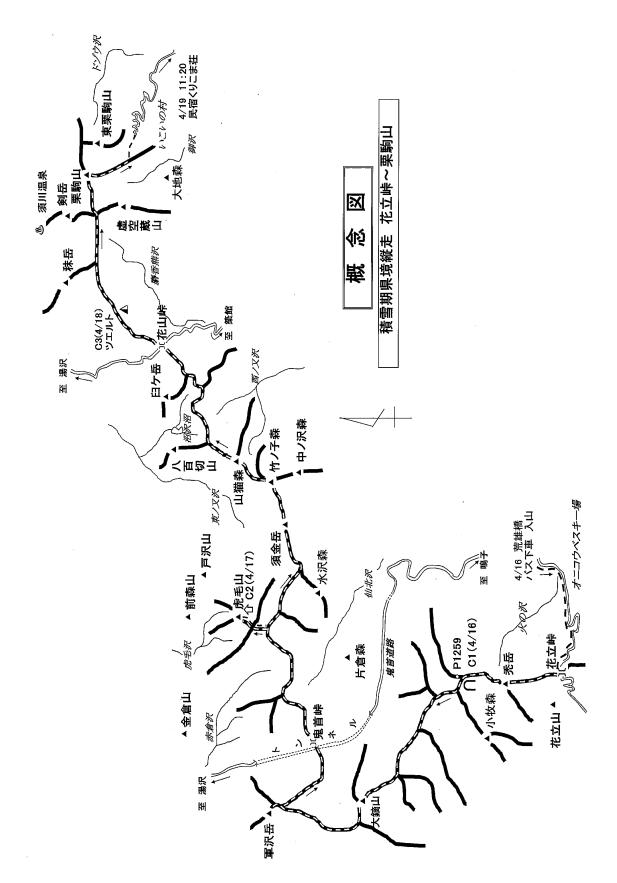
ある。 尾根上より山形側の自動車道路が光る帯となって見られた。尾根上は針葉樹などの繁茂で もある。 くはない筈なのに何やらほっとしながらも県境でこの出合は如何にも馴染み難い断層で 振りに人工物に出会ったと云うことに戸惑いを感じてしまう。 牧場と称する緩斜面の一大雪田であった。驚くことに電気牧柵が雪面上に顔を出して久し ら一応の視界が与えられ気分も軽い。今日中に人里に降りられる可能性が強まってくる。 いこの山塊は偵察なしの一発勝負あった。昨日は盲目飛行様相でであったが今日は曇なが 分間で到着した。これで今回の山行も峠を越えたと云う感覚が胸に湧いて来た。夏径もな 前進を妨げられる。二五分間の昼食の休憩後いよいよ峠への降りとなる。降り出したら数 神経を費やすところである。 峠から三○分のアルバイトにて一一:二○、六二五Pに立つ。南望する足下一帯は宝栄 吹越と称される鞍部が西方一〇〇〇メートルにあり、その名の通り風道となる地形上に それを撮影。鞍部九:三〇、ラッセル膝くらい。 。しかしこの附近は平坦な緩斜面上に県境が走りルート判定には気を使うとところ 五〇分を要して五六一P、 この附近は地形が判然とせず多少 鍋越越の小峰で昼食とした。途中 海抜も低くもはや人里も遠

であろう。 遥かに牧場小屋らしいもの一つ、夏はさぞかし緑の原野となり牛馬の群れがのどかなこと 度一二:○○である。西面一帯の白銀の牧場—広莫として掴みどころなしの感じである。 であった。 かける。 見透しをつけて戻りザックを担いで五五〇メートルの真白い小丘に上がる。丁 六三四P附近から尾根をはずして南へ直角に下る地点でザックをデポし偵察に

指して下る。これより四キロメートルは何度か通ったルートなので何やら懐かしい。頂上 きた。雪は降って夏径伝いの道は難儀であった。 八メートル地点の銀山川の橋に出る。一五:二○、ここで一本、ザックが肩に喰い込んで の数本寄添ったアスナロの樹々、天沼に下る快よき斜面、 ように刻々とワカンを踏んで行く。頂上は狭くそこから振り向く翁峠の山塊は既に雲中、 セルは重い。最後の山、半森山(七〇九メートル)へは気合をかけながら時計のリズムの 採帯が広がる。又も雪降りになってくる。低山帯のせいか温度は比較的高く雪庇上のラッ る。小峯三つを経て六三九Pに達し、ほぼ一三:○○、左手宮城県側の沢向うは 一○分の大休憩で半森山に名残を惜しみ一四:○五一気に一○○○メートル先の天沼岳目 残るは銀山温泉までハキロメートル余、そろそろ最後の山、 杉林のラッセルを続けると三三 半森山も見えがくれして来 一面の伐

物してのんびり帰仙した。 物してのんびり帰仙した。 がしてのんびり帰仙した。 がしてのがス停に着く。バスを待つ間、山菜手打そばなど食べながら静まり返った温泉の景ののバス停に着く。バスを待つ間、山菜手打そばなど食べながら静まり返った温泉の景の山温泉の裏でワカン装備を解除、軽快な登山靴となって温泉街を脱け一六:五○温泉

(やまびと二三号掲載)



積雪期県境縦走・花立峠~栗駒山

昭和五〇年四月一六日~一九日 今出隆康 (単独

るには二〇万地勢図が必要となる謂わば地勢図山行とも申すべき性質のものである。測距 栗駒山、これらを並べると縦三枚横三枚となり、五万分の一図でも三枚つなぎ、一枚でみ 旅の決行となった。二万五千図でつなぎ合わせて六枚の鬼首、 を収めたにとどまり、その後チャンスを狙っていたが既に四月も半ばとなり今冬最後の山 六日栗駒山より南下の目的で仲間の支援のもと登頂したが風雨暴雪の為かろうじて一峯 のトレースで全線を結び落着した。 いと考えていたが天運の味方を与えられ悠々と遅すぎた冬山を踏破し「後仙台山脈」は私 してみると延長六五キロメートルに相当し、よほどの僥倖に恵まれぬ限り完全縦走は難し レースし更に四月三日花淵山、大柴小柴の縦走トレースに成功し残る花立峠以北は四月五 三月二四、二五、二六日の三日間、 銀山温泉より鍋越峠、 翁峠経由境田までの県境をト 向町、 鬼首峠、 軍沢、桂沢、

で一時間以上の空虚な時間を費やすことになった。 り速度だせずわずか二分の差で五:二一の一番列車は発車していた。単車で四十余キロメ 線は、 ートル、寒冷と濃霧とザック装備の重量に耐えてやっと着いた陸前古川駅であったがここ 未明にもかかわらず大型車両の往来激しく次々追い越され危険な上、途上より濃霧帯とな 四月一六日、弟の運転するメグロSGに乗せてもらい古川駅まで行く。前日まで陸羽東 国鉄ストの拠点と云うことで心配であったが解除となっていた。しかし、 四号線は

向部落経由禿放牧場に入る。 二番列車六:二八に乗車、 鳴子でバスに乗換え七:四〇発車、 九時に放牧場、天気は素晴らしく大柴小柴山、禿岳が青空に 荒雄橋下車、そこから小



冬のブナ林

てつくられた道路は雪で埋まりトラバースの連続である。十時一本立ててロングスパッツ

て花立峠に出るため道路迂回部はダイレクトに雪と枯藪をつっ切って進む。北斜面を切っ

今朝の失策、

白銀を聳えさせて見事である。放牧場は雪と草地の比率が七対三位に後退し草地や道路

部が露出し蕗の蕾の花ざかりである。高温無風の為発汗激しく雪は腐りペースは上がら

前進の長丁場を考えると天気とはうらはらに多少心が曇る。車道を伝

をたどってみる。虎毛山までのルートは確認できた。 を含め家族登山したばかりの頂上でもある。快晴ではあるが水蒸気が多くなり霞が濃くな 時間で登り二等三角点(一二六一メートル)頂上に着く。 りに腐って適期は既に過ぎたことを物語る。頂上部の肩に鉾を持った不動明王の祭祠があ 後出発、頂上まで三、四キロメートル一二○分の道標があった。すぐに雪径となり雪は腐 霞ながらもはっきり眺められる。峠には雪は余りなく夏径が露われている。半時間の休憩 ってきた。県境は複雑なので地図と照合してあのピークこの尾根と県境を指呼してルート 北方に虎毛山を盟主に殆んど水平な頂稜をなす間の岳、 した芝の上で昼食。しばしのごろ寝でウトウトする。春風駘蕩正に春のそよ風がみなぎる。 柵を巡らしその部分のみ除雪したように乾いていた。道標通り高距四六○メートルを二 一 : 一 〇 花立峠 (八○○メートル)に到着。思いの外時間がかかってしまった。 須金岳、 半年前六五才の母と三才の末娘 更に遠く栗駒山の勇姿が

四通過。 庇がズタズタに崩れそれを逃れての連続となる。 カン着用。中間鞍部まで一五〇メートルの急な下りに備える。しかし下りは早い一四:一 頂上滞在二○分にて出発、暑いので下着一枚サングラスのスタイルである。ここからワ 鞍部は笹薮が広く露出しワッパのままのヤブコギとなる。 一四:四五中間ピーク通過 ひどく痩せた尾根は雪

なく一旦肩部まで戻って尾根を若干はずさなければならない。戻りつつ県境を捜せば、 五:三〇、禿岳北峯(一二五九メートル)頂上に達する。 しかしこの主稜は県境では

励む。 上で天気図を描く。西日本では停滞前線の爲雨ふりが多いが北日本は安泰である。これに 重量的に有利であるしスコップはヤブコギの抵抗が著しいせいである。一六:○○雪庇の りをつけて斜めに急降。 は体力的にも精神的にも酷使の連続であるから初日の無理は禁物である。本日の行程は約 休養をとって明日に備え、明日は一躍虎毛まで飛ばしてやろうと意気込む。何しろ入山前 は気をよくした。今日のビバーク地点はせめて向町の地形図から脱出したかったが充分な 二キロメートルで停止し、これでも上出来なのだと自身に云いきかせながら雪洞造りに 間も考え早速雪洞作業に着手する。 勾配が緩む所で雪洞に適した雪庇をみつける。天気図キャッチの 今回はスコップを持参せず雪洞鋸一 挺のみである。

ぎりをおじやにして食べた。 沢川白沢の源頭に転落して行った。充分な居住空間を得て満足であった。夕食は玄米おに 七日三:○○起床。予定通り五:○○発進に成功。 静かな夜を迎え二〇時就寝 既に明るく、 目指す県境尾根が拡

一八:一○雪洞は完成した。二・五立方メートルの雪のブロックは数百個に切断され

一○四四P、通過、次の一一一○Pの肩で一本。五:三五である。写真撮影、禿岳北峯安全である。早朝にもかかわらず軟雪気味である。て突っ込める。瘤より右折して一○○メートルの胸突の下り。ワッパのグリセードの方ががっている。眼下の尾根末端の瘤めがけて急降する。この雪庇はしっかりしていて安心しず、日子三・〇(麦皮)、「麦皮)

の県境尾根接続点の雪庇に一点白々と我が宿りの掻き雪が望まれる。

雲多く西の風二~三メートル、軟雪状態が続く。六:二二雪洞からみられた白い肌の山 |三〇Pに着く。これは山形県側の伐採によるもので、この付近は皆伐である| たりしながら前進、 雪庇は落ちはじめクレバス激しく薮こぎを強いられたり安全度を推計しては雪庇を渡 日がたかくなる前に大いに稼ぐつもりである。 天気は晴れ なれど薄

虎毛山、片倉森、千秋ラインなどが次第にクローズアップされて来た。次の三角点一〇

ある。 が美しい高山蝶であったりする。 を頭脳が失い一種虚脱状態となり足のみオートパイロットとなって行動していることも の真似をする鳥たるを覚えるのみ。 山のこととて尾根に夏道があるわけでなし、ブナの木に見事なサルノコシカケを何度も見 活苦などを払いのけてこの許された時間にたとえ短歌の一つでも念じるなれども所詮鵜 もあった。煩悩の現し世から解脱して天海を旅する身になおもつきまとう俗界の愛憎、 な何種類かの小鳥たちの鳴き声と姿である。また次第に大きさを増す虎毛山の重厚な姿で てくれるのが露出した尾根の薮に見える咲き始めたしょうじょうばかまであったり可憐 か喰い込んでそれでなくても痩せた鎖骨が折れそうに痛くなってくる。そんな辛さを救 かけたが今の自分にはその余裕はない。下着一枚の肩にはベルガンスザックがいつの間に 本として夏蜜柑の皮を彼の置土産として立去る。時たまけもの道らしいものもあったが深 五四Pに向うが途中足下のブナの木の雪穴から一匹の兎が飛び出し驚かされる。そこで そんな時はよく幻影を見たりする。立木や岩が人間に見えたり、雪上の一枚の枯葉 又、肉体と精神がいつの間にか遊離し歩いている感覚

れた。頭蓋骨のみはなかった。又附近には夏径らしきものが尾根筋にありカンダハーのス を想像した。 プリング程の鋼索が二・三ヶ所木に捲き付けられて錆びて吊り下がりちらりと密猟の場面 幻覚ではなく大鏑の近くで獣の骸をみた。兎とか熊ではなくかもしかではないかと思

トル強の登りであり二五分で結んだ。た結んだ。ちょうど一○○メートル弱、大鏑山へは一○○メートルの下りと一○○メーを結んだ。ちょうど一○○○メートル弱、大鏑山へは一○○メートルの下りと一○○メーセ地点を定めるのはさぞ難儀なことであろう。同地点より三五分で次の三角点一○九三P在地点を定めるのはさぞ難儀なことであろう。同地点より三五分で次の三角点一○九三P在地点を定めるのはさぞ難儀なことであろう。同地点より三五分で休憩し行動食をとる。大鏑の山形県側はかなり伐採されて真白い斜面になっている。一○五四P、七:一○通大のの一段のであり、一〇五四P、七:一〇通



軍沢岳付近の稜線

前方の山より段々と底雪崩の響きが伝わって来る。

いずこ雪洞を造れる適地である。一五分の休憩中に水筒に雪をつめこみ水作りを試みる。

実にその線を守って一一二〇メートル附近まで登る。 道可能ただし沢を二つ横断しなければならない。しかし県境トレースが目的であるから忠 ずして一三〇度右へ大変針すると云う不思議な県境が存在する。地図上は積雪期ならば近 四〇分の行動の後、 一一:○○軍沢岳前峯に着く。再び一本。この先は大きく主稜をは

れる。気力体力共に充実して今宵の宿りは虎毛山山頂小屋と腹は決まった。

大鏑山より西へ進むこと八○○メートルここで尾根は南北にT字路に分かれ北折して 一〇〇〇メートル一〇一六Pにて一本立てる。この附近の南面は安定した雪堤を型造り

し遠く高松岳虎毛山など根張りのある尾根尾根に支えられ重々しく雪をまとって眺めら

神室山などの尖峰が白銀に輝いて素晴らしい。北に目を転ずれば近々と軍沢岳、

頂上は大きな雪田となっていて見晴らしがよい。天気晴、

視界よく西望の神室連峯は

である。 可能なように思われる微妙な地形を抱含し三県の国境を背負って立っているのが軍沢岳 簡単に横断し秋田県雄物川水系の源流たる役内川マタゴ沢に注ぐとか、そんな取越苦労も ぐとか、もっと極端に本流が支沢を貫き、更に屈曲しつつ鬼首峠へ下る県境尾根をいとも が支沢に突貫するとか又は、全く水系を変えて県境尾根を貫流して最上川上流の白川に注 走り両沢に挟まれた九一八メートルの台地尾根を囲むように台地末端に吸収される。本流 離を保って並行し鋭角の逆V字型の尾根の狭間に吸収される。黒滝の直下には支沢が北 県境が海抜八○○メートルを割って最低鞍部となる附近は県境と僅か六○メートルの距 形が観察される。軍沢川は県境から七五〇メートル東南東に黒滝を懸けるがその上流部 沢の略奪地形などと云う言葉があるがこの軍沢岳も軍沢川の源頭付近には興味ある地

同地点より一○分程雪庇を登り一一:二○尾根はずしにかかる。 雪庇のウィーク

これには半時間を要してしまった。 び三○分余にて第三の頂上九五七Pに達し雪庇を渡って行く。その先一○八七Pは軍沢岳 半時間後に峠山に登り一本立てる。附近は地形複雑なので詳細に観察し針路を定める。再 キロメートル以上のアプローチと高距は六〇〇以上、その間十峯程のピークが連続する。 囀り全く天国である。まずはポンチョを拡げてワッパ靴を脱ぎ靴下を絞って木の枝に吊る 六時の天気図キャッチの為に一○分前にザックをおろし附近の偵察と天気図作成を行う。 積雪断面は一○メートルはあった。一五分の休みの後いよいよ虎毛山への登りとなる。六 はブルドーザの轍の跡が来ていた。 海抜八一〇メートルの鬼首峠に着く。 締める。二○分の登りで九五五P通過。眼下に迫る鬼首峠を目指す。四つ程の小峯を経て 七〇分も憩うていた。しかし体感温度の割には靴下が乾かず又湿ったまま履いてワカンを しザックを枕に寝転がって食事をする。燦々と降り注ぐ春の太陽を全身に浴びてまあ何と)囲んでくる。降りきったやゝ広いコルで大声を発して休憩を宣言する。無風快晴小鳥は まま四〇分間緩い上下を繰り返し歩きまくる。高度の低下に伴い橅の大木が独り者を取 ・イントを突破して急激な高度差一二〇メートルの下りである。下りの勢いにまかせてそ 頂上の遥か手前から主稜をはずし大変針して戻るように尾根をわたる所である。 秋田側遥かにブルのエンジン音が幽かに響いて来る。 一四:一五である。既に除雪作業も進行し宮城県側

同様ガスが次第に濃くなってゆく。広大な雪庇のうちは稼げたが、 て突進すべき時である。 ここで間近に迫る虎毛山の勇姿の撮影を行う。第六第七峯を越えて、虎毛山への最後の下 前峯に立つ。)メートルはかなりきつく感じられる四〇分間であった。 高原状の頂上を見やれば神室山 ^のコルを一七:一五通過。 以後ワッパは順調に進み半時間後には長い嶺の初峯たる第五の頂上一〇八六Pに 太陽は隠れ神室山には雲が蔽い被さり夕気が肌に冷々ともはや小屋目がけ しかし大して傾斜もないが、この高距一七〇メートル距離 高距二五〇メートルの急な登りを突破して一七:五〇虎毛山 頂上部は低潅木や這松

の寸前に有難し頂上の小屋にたどりつく。 儀なくされ加えてガスが小屋の在りかを隠してしまった。すっかり暗くなりラテルネ必要のために一足毎に腰まで陥没する状態が連続し疲労を倍加させる。思わぬ伏敵に転倒を余

パンと夏蜜柑で朝食。出発は遅れ六:二○となった。外は霧氷の花盛りとなり又強風とガ ズもガンガン凍っていた。不覚にもマッチを湿らせてローソクもホエブスも使えなかった。 側のベニヤ戸板一枚敷いて一三時間半の行動に耐えた体を横たえることができた。 けぬよう雪洞生活の如く身を屈めて行動しなければならない。 奥のほうを雪ならしして内 あるが鋸で雪を切り部屋に入れば床上には平均一メートルの積雪であり天井に頭をぶつ んで小屋の中は一冬中の雪を貯蔵してぎっしり埋まっていた。広さは四坪程の避難小屋で 一八日、海抜一四三三メートルの冷凍庫の朝は零下三五度で迎えた。靴オーバーシュー 時計を見れば一八:三○。喜んで入り口に廻り込めば又もがっかり扉はどこかに吹っ飛

せる。 みしめつつ今はもう明るく展けてしかも低温でしまりにしまった雪を味方に須金岳を目 鬼首峠へのルートも見える。 附近である。七:一○より待機、程なくガスが晴れて低い方から見えはじまる。大柴小柴、 の切れ間から見えた現在地点を不審に感じて行動を停止する。場所は一三四三メートル米 を定めて東方へトラバースをやり浅い地形を通過して目的の広い郡境尾根にルートを乗 形図記載の夏径記号と信じていたのだったが。そこで引き返し時々切れるガスの間に方向 ガスの間に顕著な対岸尾根がチラリと覗かれた。おかしい。赤倉橋へ出る夏径らしい。 う夏道切通しがありそれを辿ったら方向が次第に西方にカーブしていくのに気が付いた。 スで真冬に戻っていた。全オーバーで有難い山頂小屋を離れた。小屋の前を一筋南に向か 間もなく昨日の我がラッセルを発見した。しかし又も失策を演じてしまった。ガス 万滝へ落ちる間尾根に入りかけていたのだ。重なる失策を噛 地

さっきのガスは嘘のように晴れて撮影日和となった。直径一二メートル程の巨大なカル

デラ地形と思われる馬蹄形を成す花渕、 子森、 感慨を呼び起こす。 清水倉森等の外輪と荒雄岳の中央火口丘が興味尽きない景観を提供して見るもの 大柴小柴、 禿岳、 片倉森、 水沢森、 虎毛須金、 竹

を望むことができるのも大きな収穫となろう。 いて薮も無く安心して歩けるし大した登り下りもなく愉快である。又この附近は名瀑万滝 地図通り尾根通しルートはぐにゃぐにゃと曲がるけれども広い尾根はしっかりとして

ように地表を抉りまた雪渓がびっしり稜線まで突き上げていた。 尾根に突き上げる一支沢もすごい迫力で撮影者の眼をとらえる。その部分のみ切り取った 景色と対照的に静と動のコントラストを以ってそこにあった。また、万滝の下流よりこの そこで万滝を撮影する。壮絶な赤黒い岩壁より落下する百メートル余の大滝が周囲の雪

すぐ第一峯があり間もなく第二峯そして山猫森とほゞ五〇〇メートル間隔で現れる。全般 なっている。竹の子森もうまく尾根尾をはずしていかなければならない。尾根をはずして 壊しヤブコギを強いられる。一○:三○竹の子森通過。この前後は雪庇がナイフリッジと 象通報をキャッチする。九:四○出発。これより痩尾根の連続となり雪庇はズタズタに崩 食休憩とした。 に痩尾根ヤブコギであり稜線の雪は少なめである。一一:一○山猫森通過。数分下って昼 八:二○、一二三七Pで一本。更に須金岳を通過した所で九:○○となり大休憩とし気

鬼首、 をやれば深い四囲の尾根の底に青黒く沼沢沼が湖面の三分の一を氷として浮べ静まって 尾根はずしが控えていた。高距二八〇メートルの下りである。この下りとともに地形図も た。雪の急斜面は雪が腐り時間を充分に費やし一歩一歩キックステップで堅めて下る。 半時間休憩の後、十数分での行動にて山猫北峯一〇一五P通過。ここで本山行六度目の 二:四〇コルで一本立てる。七三〇メートルと云う高度は本山行中の最低地点である。 向町、 鬼首峠、 軍沢と四枚の地形図から抜け出し桂沢へと移るのである。北方へ目



らせ樹木の蔭がその上に縞模様を描いて美しかった。 が点火しローソクとホエブスが活躍した。一九:○○就寝、半月が青白く雪景色を浮上が より雪面整地、 思いもよらぬ。 見当らず一六:三〇試掘の結果断念、吹溜り地形ではすぐ樹木にぶつかって深い雪洞など ○メートル程前進して八五○メートル台地上部附近に雪洞を求めるが望み通りの雪庇は うここまで来たかと感激もひとしおである。もう一奮張りと行動食を貪りながら憩う。こ の先は栗駒山への登りであり尾根らしさは乏しく大斜面のトレースとなる。峠より一五〇 大境峠は一五:三○であった。車道上は一・五メートルの積雪で蔽われている。とうと 支柱、フレームを笹竹でつくり三○分で幕営完成、懐で暖めていたマッチ 沢状地形の風の当らぬ林間にてツエルトビバークに切替える。一七:〇〇

疲れる。風は寒いが下着一枚、手袋なしの素手、サングラスで頑張っている。一四:四〇、

いずれも視界良好である。一四:二二、九四〇Pにて一本立てる。少々

この附近も地形が混み合ってめんどうである。一三:

コル通過。

八五〇メートル通過。

小峯にて一本。カッターシャツ着る。一五:一○、九一二P通過

ぼ一〇〇〇メートルから上は雲中に隠れて眺められた。第五の地図桂沢を脱出しつつ最後 五それを登り切る。稜線も近くガスと強風が強まってくる。 程の前進で一息入れ、 ので勇気をつけて夜が白むのを待つ。五:○五勇躍露営地点を発進、最大傾斜線に向って 地図栗駒山へと乗り移ってゆく 九日、二:五〇起床。 天気は良く西風が強い。 ここから第一の壁の急傾がはじまる。 月は既に隠れ満点の星が漆黒の空をちりばめている。 寒気酷しく雪面は堅くアイスバーンとなっている。三〇分 振り返ると遥かに虎毛山がほ 続いて第二の壁を登り六:一

やと撮影待ちしたが徒に時間を空費するばかり。 三五○Pに立てば吹き上げる風とガスが物凄く山体をゆさぶる如く時 断面をのぞかせて秣岳稜線や龍泉ケ原上部の火山性露岩を現してはまた沈める。もし 一五分の待機から解放されて七:〇〇 々切れ切れに



方六五キロメートルの道程を指で辿ってみられなかったことである。 柱の前に蹠づいた。服装も帽子もピッケルも霧氷で浄められていた。ただ残念なのは来し に立った。寒風二〇メートルに身を曝して雪もかなり消えて露出した岩屑と国定公園の標 ンを滑って行く。二五分後、私は長い山旅の終着、最高峰の栗駒山(一六二七メートル) を隠して一息つく。一帯は新しい露氷岩氷が咲きそれらが千切れてカラカラとアイスバー あるが這松上の吹溜りは時として陥穿を成している。七:五〇、一五六六Pにて岩蔭に身 風に翻弄されながら稜線をたどる。風衝激しい稜線の夏道はかなり露出して辿るに容易で

やら一本にまとまった。 くして南端は西蔵王の番城山からは北は栗駒山までの宮城県県境尾根の単独縦走はどうり目に見えない大きな力に励まされ後押しされてここまで来られたと考えるのである。かはいられない。これらの日々は自分の実力で完成させたなどとは不遜な考えであり、やはかった。しかし栗駒山で霧氷の洗礼を受け四日間の行動を思うときこの幸運に感謝せずにこの山行が四月も中旬であったことは些か心残りではあるが諸般の障害でやむを得な

間で溢れる都会へと押し流されて行く自分を意識してみるのであった。 しまった。民宿くりこま荘で電話を借り仙台とつなぐ。一一:二〇同店を出発。二キロメ ころんでまどろみ最後の一枚は腕を延ばして、自ら我が日焼けの顔と山頂を撮影した。 春の陽は照り最頂部を残して栗駒山の山体を見渡せる程視界もよくなっていた。四〇分寝 した。ここまで下れば天国である。レストハウスは屋根と建物の一部が雪上に現れていた。 ートル程歩いた所で岩ヶ崎消防署の赤い車に拾われて岩ヶ崎駅でおろしてもらう。一三: 五電車に乗る。車窓を遠ざかる栗駒山は晴れわたり田舎女高生の喧しい会話とともに人 これより三キロメートル自動車道を横切り横切りして駒の湯十字路に一時間で下って 感慨を胸に栗駒山頂を辞し東南に一気に下り、いわかがみ平のレストハウスで大休憩と

(やまびと二三号収録